山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

第42号
令和6年2月28日

山口県立大学
郷土文学資料センターだより

ドラマで描く民衆史――「創作脚色作品集」出版にあたって

福　島　久　嘉（明日を紡ぐ大地の会）

「明日を紡ぐ大地の会」は2010年４月に結成されました。今年で創立14周年を迎えます。私自身は山口市に住んで67年になりますが、「大地の会」に参加するまでは劇団はぐるま座に在籍し、半世紀にわたって創作・演出・制作活動をつづけてきました。

「大地の会」の結成には、はぐるま座の仲間を中心に10名が参加しました。会創立の目的を**「芸術の力で平和で心豊かなふるさとを築く」**ことに決めました。目的達成のためにはまず、ふるさとの生きた歴史を学び直すことが肝要でした。私たちはふるさとゆかりの詩人・文学者たちの作品と生涯を丹念に学び直し、作品の奥深くこめられた後世へのメッセージをつかみとり、そのエキスを舞台化して今に伝える仕事を一作一作進めてきました。

上演した演目をふりかえると幕末から現代まで、山口県民と日本の民衆が切り開いてきた魂の歴史を系統的に舞台化してきたことがわかります。これまで上演した作品は以下の通りです。

『吉田松陰と烈婦登波』『長州藩維新団物語』『川柳中興の祖・井上剣花坊の世界』『蒼空の詩人・井上信子の世界』『富岡先生―国木田独歩の世界』『明日の考察―石川啄木の世界』『神前結婚―嘉村礒多の世界』『オッベルと象―宮沢賢治の世界』『走れメロス―太宰治の世界』『うた時計とごん狐―新美南吉の世界』『中野重治・「春さきの風」』『原爆詩集―詩人・峠三吉の世界』『花よジャンケン―詩人・礒永秀雄の世界』『へその耳―詩人・和田健の世界』『おせん淵―詩人・大佛文乃の世界』『郷土詩人・小島寿美子の世界』『民衆詩人・野村稲波の世界』『いのちの道しるべ―種田山頭火の世界』（前・後編）『新作　剣花坊・信子の川柳物語』

こうして並べてみると、さながら「ドラマで描く県民史（民衆史?）」となっていることがわかります。なぜそうなったかといえば、私たちはこの地で創設され、60年以上育てていただいた芸術集団として、これからの全活動をふるさと山口への恩返しとして実践しようと決めたからです。

いま世界は、経済が行き詰まり、資源が枯渇・荒廃し、戦争と飢えと差別の嵐が吹き荒んでいます。この現状を直視し、真に平和で心豊かなふるさとを築くために私たち日本人は何をすればいいのか?

その答えを、ふるさとの先達たちの芸術作品のなかに求めようとしたのでした。このたび出版した『創作脚色作品集』には山口県にゆかりの深い８作品を収めました。その一篇一篇には、各時代ごとに社会の圧迫や戦争の危機に立ち向かい、国民の平和と幸せを実現しようとした先輩作家たちの苦闘の歴史が克明に刻み込まれ、現代人への貴い示唆を与えてくれています。ぜひご一読ください。

創作脚色作品集

明日を紡ぐ大地の会『創作脚色作品集』掲載作品

「剣花坊・信子の川柳物語」「長州藩維新団物語」「吉田松陰と烈婦登波」
「神前結婚―嘉村礒多の世界」「へその耳―和田健の世界」「花よジャンケン―礒永秀雄の世界」
「民衆詩人・野村稲波の世界」「いのちの道しるべ―種田山頭火の世界」（前・後編）

山口県立山口図書館開設120周年記念事業を終えて

井　関　和　彦（山口県立山口図書館・主査）

郷土文学とは直接かかわりのないことがらで恐縮ですが、せっかく機会を与えていただきましたので、本稿では、山口県立山口図書館開設120周年記念事業について御紹介させていただきます。山口県立山口図書館（以下、当館といいます。）は、明治36年（1903年）に開設し、令和5年（2023年）に開設120年の節目を迎えました。また、現在の建物は、昭和48年（1973年）の開館から50年を迎えました。このことを記念して、令和5年7月1日から12月27日までの約半年間、記念事業を実施しました。

事業の内容を縷々述べてもよいのですが、それについては当館ウェブサイトの“開設120周年記念事業【記録】”のページ[1]にまとめてありますので、そちらを御覧いただくこととして、事業の「中の人」の一人として、事業のコンセプトや裏話的なもの、所感について記しておきたいと思います。

しっかりとした事業の方向性が固まるまでは、なかなか大変でした。紆余曲折を経て、最終的に、節目の年に、長い歴史をもつ当館の魅力を再発見してもらうことをコンセプトとしました。また、子どもから大人まで、多様な興味関心のある方に参加していただけるものにすることや、館の各部署がそれぞれのリソースを発揮できるようなものにすること、毎月一回は関連する催しを行い、お祭り感を演出することなどに留意しました。結果的に、山口県立大学の先生方や、日本建築学会中国支部山口支所の方々など、館外の方とも連携しながら、途切れることなく行事を行うことができました。ふるさと山口文学ギャラリー企画展として行った120周年関連展示「山口県文学のお宝資料」では、貴重書として展示した田島準子の『青雲』を御覧になった田島ゆかりの方から、お手もちの『青雲』を複本として御寄贈いただくなど、県民の方々からも支えていただきました。

とにかく、知っていただいてナンボとばかりに、広報には力を入れました。館内に幟を立てたり、紙媒体の広報紙を作製したりもしましたし、開設記念日である7月6日には、職員手作りの「本のバースデーケーキ」で祝ったりもしました。長らく懸案だったSNSの活用についても、これを機にTwitter（現 X）で公式アカウント[2]を作成し、運用を開始しました。名称がXに変わるなど、その仕様が大きく代わるタイミングだったこともあり、先行きが危ぶまれるところもありましたが、なんとか軌道に乗せることができました。

職員作成の「本のバースデーケーキ」

徐々にですが、Xのフォロアーも増えつつあるようで、一連の事業の効果はあったものと考えています。正直なところ、日常業務に加えて、特別な事業を長期間にわたって行うことは、現場にとっては負担の大きいところでしたが、特に若手職員の奮闘が事業を成り立たせてくれました。

無事、事業を終えることができ、今はほっとしているところです。しかし、120年の歴史の重みは、書庫問題や施設設備の老朽化など、喫緊の課題にもつながっています。次の10年、20年に向けた取組を始めなくては、と思っています。最後に、110周年には特に何もできなかったから、ぜひ120周年には記念事業を、と発破をかけてくださったOB職員の皆さんに感謝しつつ、筆を置きたいと思います。

[1] https://library.pref.yamaguchi.lg.jp/event-report/event-report-21937/

[2] https://twitter.com/ymgc_pref_lib

『和田健読本』（仮称）刊行に向けて

池　田　　誠（中原中也記念館学芸担当課長補佐）

詩人・和田健氏が平成25（2013）年に98歳で亡くなられてから10年が経ちました。山口県の文学における和田氏の幅広いご活躍と数多くの業績の一端は、本誌第23号和田健先生追悼号（2014年6月）に寄せられた、和田氏と交流のあった方々の追悼文からも窺えます。その後、和田氏が遺された貴重な文学資料は、山口県立大学の所蔵となり、平成30（2018）年度より、県立大と中原中也記念館の共同による、資料の整理と研究が開始されました。和田氏のご自宅から県立大への資料搬入や、調査研究開始当初の様子は、同誌第34号（2019年11月）掲載の上野浩和氏「故和田健氏資料の共同研究について」に詳しく紹介されています。そして、和田健氏資料の共同研究の成果を受けて、令和3（2021）年度より『和田健読本』（仮称）の編集委員会が発足し、令和8（2026）年度の刊行に向けて協議と作業を続けているところです。私は中原中也記念館の学芸担当職員という立場で、編集委員の末席に名を連ねています。本稿では、『和田健読本』（仮称）刊行に向けて、ささやかながら思い出深い和田氏との交流について述べたいと思います。

和田健『山頭火よもやま話』表紙

平成21（2009）年、中原中也記念館の企画展「湯田温泉物語」の準備を進めていた頃のこと。湯田温泉にゆかりのある俳人・種田山頭火に関する資料を探していた私は、山頭火と交流のあった和田氏に、山頭火に関連する品をお貸し出しいただけないか、おたずねしたところ、和田氏は一幅の掛軸を出してこられました。それは、中国の日本文学研究者である李芒（りぼう）氏の律詩「山頭火賛」が周華氏の筆でしたためられた書でした。詩は日中戦争の動乱の中でも、山頭火は句道をひたすら進み続ける、孤独に貫かれた姿勢の美しさを詠ったものでした。書軸は、確かに山頭火に関連した品ではありましたが、展示を設営する予定の展示室には、軸物を展示できるケースが無いため、作品の管理上、展示は難しいということをお伝えし、他の品をご出品いただけないかおたずねしました。それでも和田氏は、中国の著名な学者が山頭火を高く評価している事実を多くの人に知ってもらいたい。書を撮影した写真でもいいから展示して欲しいとおっしゃいます。普段のご対応とは少し違うことにやや戸惑いを感じましたが、そこまでおっしゃるのには何か強い思いがおありなのだろうと拝察し、館内で協議の結果、書の写真を解説付きで展示しました。この度、あらためて和田氏の『山頭火よもやま話』に書かれている李芒氏についての記述を読み返してみると、李芒氏の山頭火評が、戦中に詠まれた「銃後の句」への深い理解に基づくものであることに対し、和田氏が強く感銘を受けていたことに気づかされました。それらの句の中には、山頭火から贈られた句集『孤寒』に山頭火がしたためた句〈しぐれて雲のちぎれゆく支那をおもふ〉も含まれています。和田氏は、山頭火と当時の日本人に対する李芒氏の深い理解を、書を通じて広く知ってもらいたかったのではないか。今はそのように思います。

中原中也記念館「湯田温泉物語」展示風景

寄贈図書（2023年6月～2024年1月）

河村正浩『爺爺の俳句ごっこ入門－楽しい俳句非真面目な俳句－』、福島久嘉『「明日を紡ぐ大地の会」創作脚色作品集』、槇田敦子『句集　榛の花』

寄贈雑誌（2023年6月～2024年1月）

『文芸山口』第370～373号（山口文芸懇話会）、『其桃』第930～932号（「其桃」発行所）、『山彦』第177～179号（山彦発行所）、『ふるさと通信　きずな』第17～18号（ふるさと紀行編集部）、『颷』第123号（颷文学会）、『風響樹』第57号（風響樹同人）、『中原中也研究』第28号（中原中也の会）、『やまなみ』第40号（やまなみの会）、『すばる』第58号（すばる俳句会）、『研究所年報』第15号（大妻女子大学草稿・テキスト研究所）、『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』第17号（神戸女子大学古典芸能研究センター）、『高知大國文』第54号（高知大学国語国文学会）

編集後記

先日、『ニューヨーク・タイムズ』の「2024年に行くべき52か所」の第3位に山口市が選ばれたということで、話題になりました。とても喜ばしいのですが、ちょうど瑠璃光寺五重塔が屋根の葺き替え改修中というのは、残念なことです。せめてもの慰みに、過日、降雪の日に撮った写真を掲載しておきます。（菱岡憲司）

山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター（〒753-8502　山口市桜畠3-2-1）
TEL.（083）928-0211　　FAX.（083）928-2251
■発行日：2024（令和6）年2月28日